artful_settaya_002_wood-cuttings

（木彫編）

昨年10月のアートフル・サフランの摂田屋版です。
この座学と現地ガイドツアーがセットになっています。

今日は木彫編のみですが、こんな順番で、お話しします。

① 木喰上人(行道)

② サフラン大看板の力士像

③ サフラン離れの欄間　竹に雀

④ 番外編　村松円融寺
　　本堂欄間の龍

⑤ 番外編　サフラン離れに、かつてあった
　　小川悠山の紫檀の座卓

土地の成り立ち、
摂田屋の醸造のはじまり

1. 木喰の想い

木喰は、一般名称で、応仁の乱以後、
荒廃寺院の再興のための勧進の僧のなかで、
木喰行をもっぱらにした僧。

数百人とも、数千人ともいわれている。
この中のひとりが、観音を崇拝し観音の木彫りを
行にした、木喰行道上人 (1718−1810)で、特定の
寺院や宗派に属さず、全国を遍歴して修行した。

木喰行道上人は、佐渡で悟りを得た弾誓上人の尊崇

全国に約600体残る木像のうち262体が新潟県に現存し、
二番目に多い静岡県の55体を大きく超えている。
とりわけ、長岡周辺の、小栗山木噴観音堂の33体の観音像、
白鳥町・宝生寺の３３体の観音像、上前島・金毘経堂の34体
の観音像、この三つの堂をあわせて百観音は、西国・坂東・秩
父の観音霊場の再現を意図したとしか思えません。

なぜ越後に多いかという理由

越後を二度、訪れた。
一度目の目的
　尊敬する弾誓上人が仏を見たという佐渡に、行きたい。
二度目の目的
　もう一度行きたかったが、地震で行けなくなった。
　では、越後で修業、ということも、あったのでは。

養老2年（718） 三十三カ所観音霊場の巡拝はじまる

寛和2年（986年）頃 花山法皇が西国三十三所を巡拝
西国観音巡礼がさかんになるにつれ、
各地に三十三観音霊場を設ける気運が高まった

康元元年（1256） 越後三十三観音霊場

60代に3年ほど、佐渡の弾誓上人悟りの地で修業、
さらに80代になり、再度、佐渡を目指した。

ひとつの観点として

木喰さんも、良寛さんも、
当時の宗派活動への反論があった。

その思いを表に出さず、日々の
修行と生活の中で、実践した。

正統的修行の後に、
ひとり、修行のために
諸国を歩き回って伝道。

民衆に寄り添うことも、
忘れなかった。

木喰1805年　　新潟県大潟　円蔵寺
毘沙門天、三十三観音上前島・金毘経
堂の三十四観音

・三十三観音
　救う相手に応じて姿を変える、観音の三十三身を象徴
・一か所に集約という動きも発生
　例:上前島・金毘経堂の三十四観音
　　栃尾美術館前の三十三観音
・一か寺にお参りも、同等のご利益と進化

・満願出来た感謝のしるしに御礼参りをする霊場として、
　比叡山延暦寺・根本中堂や善光寺など

木喰1804年
　上前島・金毘経堂の三十四観音

その木喰上人の造仏を支えた、青柳興清ほか上前島の人々。
作業場を提供したり、小栗山、白鳥を含め、木材を調達・運搬
したりと、木喰上人の三年に及ぶ上前島逗留生活を支えた。

青柳興清は上人晩年の四年、上人の京での造仏も同行支援。
一部の作には、「加勢　大工興清六十才」などと墨書き。

四年後に上前島に戻るまで、上人の身の回りの世話に
留まらず、木仏の材料の段取りなどをこなし、「共同制作者」
の域に達していたものと思われる。
（前川のあゆみ　　同編集委員会２０１５より）

～　木喰が60を超える晩年期の作品は、口元に微笑みを浮かべ優しい表情の「微笑仏」とも言われ、拝観すると自然と心が和み温かな雰囲気に包まれます。越後逗留の時期は、まさに「微笑仏」です。
そのような土地が摂田屋の近くにあり、そのような人がいた。
美術史・宗教史的にも重要であり、大切な観光のコンテンツ
でもあります。

～それぞれの施主の、それぞれの祈願

＋

それらに応じながら、作者自身の心に秘めた共通の意義

木喰	弾誓上人への尊崇の念	観音霊場を再現
雲蝶	大瀧和上の想い	打ちひしがれている 民衆への慈悲
伊吉	仁太郎の想い	薬師如来への祈りの 世界を再現

今日は木彫編のみですが、こんな順番で、お話しします。

① 木喰上人(行道)

② サフラン大看板の力士像

③ サフラン離れの欄間　竹に雀

④ 番外編　村松円融寺
　　本堂欄間の龍

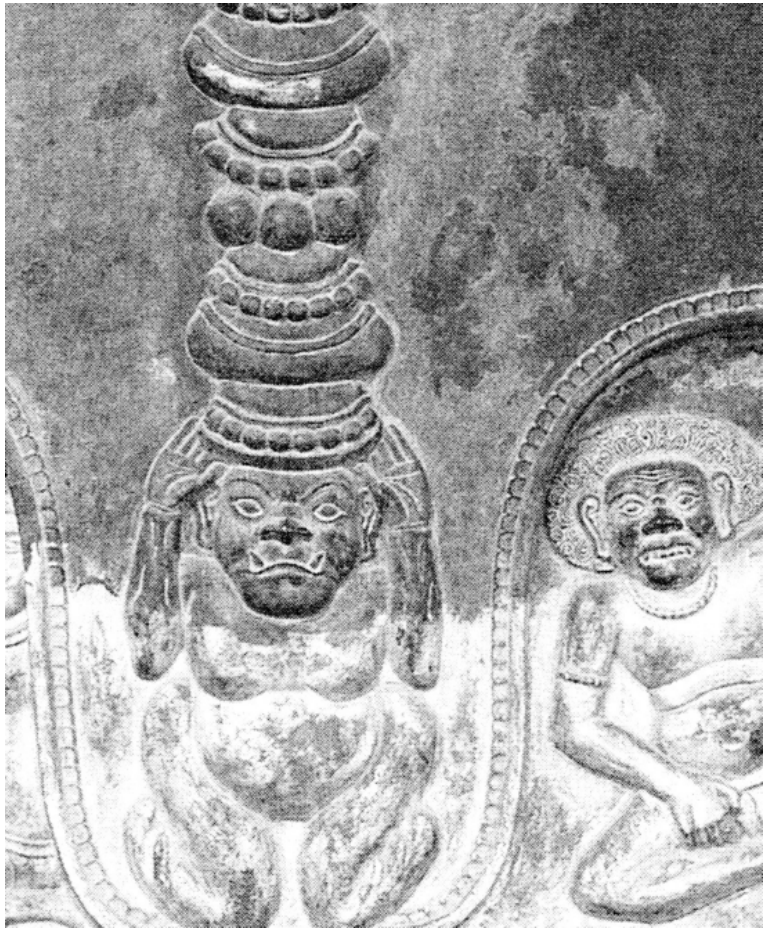
⑤ 番外編　サフラン離れに、かつてあった
　　小川悠山の紫檀の座卓

土地の成り立ち、
摂田屋の醸造のはじまり

② サフラン大看板の力士像

薬師如来像台座の
異形像（力士像）

異形像は台座腰部の
四面に、計十四体が
浮き彫りされており、
うち南北二面の中央、
二つの愈(がん)形の
間にはそれぞれ一体、
脆坐する異形像を
あらわしている。



サフラン大看板の
力士像

サフラン大看板の力士像

薬師如来像台座の異形像（力士像)には、インド由来、インドネシア由来など、諸説があるが、いまでは、「仏法の守護者」という説が有力らしい。

大橋一章 松原智美　編著、「薬師寺 一美術史研究のあゆみ」 里文出版(2000)の中に、第二章付 金堂薬師如来像台座 「薬師如来像台座の異形像 」
筆者は、下野玲子氏（早稲田大学會津八一記念博物館主任研究員）

サフラン大看板は、名工　金子九郎次の作

柏崎宮大工集団の、有力メンバ

柏崎の宮大工集団とは、
北前船の運行により、全国から仕事を請け、
代表的なものに、函館の高龍寺がある。

サフラン酒の随所に、「双龍」と「宝珠」（薬師如来）

ちょっと飛躍しますが・・・

薬師如来台座の装飾

（薬師寺・薬師三尊像、如来坐像の台座の装飾）

鏝絵蔵の装飾として、仁太郎さんが、薬師如来を荘厳する台座を意識したとしか、思えませんが、どうでしょうか。

葡萄唐草文

衣装蔵の鉢巻に大きな葡萄唐草文
この文様は、アッシリアに起源し、ギリシア・ローマ・パレスチナから中国・日本等へ伝播したとされる。
中国由来というより、ペルシャ、西アジア由来であり、
命の連鎖を表すもの。

③　離れ座敷　玄関前の「竹に雀」の黒柿　欄間

美しい黒柿の大きな希少材木、渋の天然の配置を見事に生かしたデザインの力、
堅い柿の木を一木・透かし彫りにした指物師の技、この三つの奇跡の集約。

「竹に雀」の拡大　～頭部、羽の絶妙な渋の生かし方

よく考えますと、「見事」と言うしかない、奇跡の彫刻です。

（１）この40*20cmの一枚板の柿の木は大変な大木、しかも
　　黒柿という貴重なもの。
（２）彫り込む前は、この１、２cmセンチ手前の平面にある縞文様
　　を手掛かりに、少しづつ彫って、その奥の黒や茶の色の位置を
　　想像しながらデザインを決めていったはず。
　　黒柿の出方を知り尽くした人なのでしょう。
（３）堅い柿の木を、一木の透かし彫り欄間に仕立てた、
　　指物師の腕も凄い。

迎賓館の玄関を飾るにふさわしい逸品と思います。

このような、奇跡ともいえる欄間の製作を
指揮した指物師は不明ですが、
ただものではない。

黒柿の美
樹齢数百年を越える柿の古木のうち、ごく稀に黒色の紋様があらわれることがあります。この紋様があらわれた柿を「黒柿」と呼びます。

150年以上の古木にのみ現れ、１００００本に一本という出現率とのことで、希少で、高価な材木です。

黒柿の成因

根の白色部分で、球菌などの微生物がCa,P,S,Clなどを取り込み、生体アパタイト（燐灰石）を形成し、成長するに従い、更に黒色化。
そして年月を経るにしたがって、幹の辺材部に黒色の縞模様（孔雀杢）を作りながら珪化木（植物の化石）を形成することが証明されました。

2. 美は細部に宿る

手元にあった『原寸美術館』を
眺めていて、気づきました。

実際、そうなのです。

美術館で、絵を見るとき
本で、絵を見るとき

フィルタを通じてみている

いままでに見た知識
　その画家の絵の体験
　その画家の本で読んだ、見た知識と経験

絵画全般の知識

絵画を美術館の展示室や本で見るときの、
「距離をおいて眺める美・縮小の美」と、
「原寸大の美・拡大の美」との違いと同じではないか。

「観光で得る心象」とも同じではないか。

どこかで、細部の表現を知っていると、
本当は、こうなのだ、ということを知っていると、
絵を見ていても、観光で見どころを見ていても、
「細部は、こうなっている」、と
頭の中で見てしまっている。

～　観光とは、何なんだろうと、
　考えてしまいました。